

44. キャリア中期における看護師の実践の意味づけ

平瀬節子・尾原喜美子(高知大学医学部看護学科)

【研究目的】キャリア中期にある看護師の実践の意味づけの要素を明らかにする。

【研究方法】経験年数 10～25 年の看護師を対象に質的帰納的研究を行った。データは 2005 年 6 月～9 月にかけて半構成的インタビューガイドを用い、逐語録とした。データから浮上する意味を抽出し、カテゴリー間の特性と次元を比較しながらコアカテゴリーを発見し分析した。

【倫理的配慮】対象者に、研究の意義・方法、プライバシー保護に関する情報の取り扱い、研究参加に対する自由意思の尊重、研究結果の公表方法について書面を用いて説明し、承諾書によって同意の確認を行った。

【結果】キャリア中期における看護師の実践の意味づけは、[適切さ][有能さの発見][信念の自覚]の 3 つの要素から構成され、10 のカテゴリーが抽出された。(表 1 参照)

表 1. キャリア中期における看護師の実践の意味づけ

| 要素 | カテゴリー | サブカテゴリー | 要素 | カテゴリー | サブカテゴリー |
|-----|-----------|-------------|-----------|--------------|-------------|
| 適切さ | ケアの手ごたえ | ケアの効果の確認 | 有能さの発見 | 効力感 | 患者からの学び |
| | | 他の看護師との比較 | | | 自分に対する肯定感 |
| | | ケアの影響力 | | 自信の深まり | 意欲につなげる |
| | 仲間から認められる | 同職者との共有 | | ケアの発展 | ケアに対する自信 |
| | | 師長から認められる | | | 経験の積み重ね |
| | | 医師から認められる | | | ケアの探求 |
| | 信頼の深まり | 感謝の言葉を受ける | 信念の自覚 | 積み重なった看護のこつ | 判断の視点を持つ |
| | | 個別に存在を認められる | | 状況に応じたかかわり | |
| | 経験の意味づけ | 理論と経験の一致 | | ケアに対する基本的な構え | 自分の特徴の活用 |
| | | ケアの振り返り | | 看護師としての存在感 | 人に対する基本的な姿勢 |
| | | | | | 独自の役割の自覚 |
| | | | | | 職場での存在感 |
| | | | 職業に対する肯定感 | | |

【考察】[適切さ]は、看護判断および看護実践の妥当性を看護師自身が認識するという、看護実践の承認の中心となる要素である。看護師は、看護実践の妥当性を患者の反応からケアの手ごたえ、信頼の深まりを感じ取っていた。ケアの適切さを判断する際、患者の反応からケアの妥当性を判断するのに加え、同僚や上司の共感や支持を得ることによって起こる自尊感情は、看護実践の承認を確固としたものにする。また、[有能さの発見][信念の自覚]の2要素には『自己の気づき』の側面が認められ、それらは看護師の内面の育ちと捉えることができる。このような体験が、看護実践の承認をより確かなものに発展させると考える。(本研究は平成 18 年度高知大学大学院医学系研究科看護学専攻 修士論文の一部である)